

ティーチング・ステートメント

所属 薬学部薬学科

名前 加納誠一郎

作成日 2024年3月16日

【責任】

薬学部に所属し、専門科目である「機能形態学Ⅰ・機能形態学Ⅱ」を中心とした教育・研究活動を行っている。実習では「介護福祉体験実習」「臨床薬学実習Ⅲ」及び「総合演習Ⅰ」では年度毎の知識を確認のための演習で教示する。主たる教育活動は、人体の生理・構造・生理反応・恒常性維持機構に関わる神経系の役割を教示。1-6年生のクラス担任、4・5・6年卒業研究指導、百人一首部顧問・剣道部副顧問を担当。

【理念】

「機能形態学」を基礎として、将来、医療人として薬物の適正使用の確保するため疾病を理解するための土台にしてほしい。進級時は「病態生理学・薬理学」等の科目に応用できる基礎となる知識の定着をはかってほしい。疾病の理解には「正常と異常」の相違が把握され、恒常性が破綻するメカニズムを正常な生理反応と対比して理解する必要がある。疾病による症状・症候の把握に加え、治療薬が「どの部位に作用しどのような体内運命を辿るのか」など薬物治療の観点から人体の総合的な理解の基礎となる科目が機能形態学であるため、繰り返し学修しながら、将来的には患者目線・治療目線にたった薬物療法の具体化につなげるための基礎を学修してもらいたい。生理反応の「正常と異常」の根拠を具体化させる知識を教示する。また、研究活動では、未知と既知が把握され、未知の研究への挑戦のための基盤となる知識を培ってほしい。

【方針・方法】

●講義科目

方針1：人体の生理反応の基礎と構造の理解の具体化・学修意義を明確化する。

方法1：授業では、生理反応を起こす人体の構造を意識させることに重点とするため講義プリントとスクリーンで提示する画面を同一とし、学生自身が講義を聴く上で、説明箇所や提示箇所が迷子にならないように配慮している。講義内容の理解度向上のため「小テスト」前に「演習問題」を提示し、自己学習時に講義で説明した意図について演習問題を解くことで具体的に必要な知識をはかり学習意義を明確化させる。解答提示後、理解が不十分な内容を回答し、更にムードルにより全員に認識させ、フォローアップする。「小テスト」後、認識不十分な点についてはフォローアップのため授業アーカイブを残す。

方法2：人体構造の理解のため人体模型を用いることにより、医療人としての根幹となる「器官・器官系の構造」と「生理反応を引き起こす人体の構造」、「治療に必要な薬の学修意欲や知識」を得るためのモチベーションアップをはかる。

方法 3：科学の発展における生命科学の活用意義を把握に、「講義・PBL・自己学習・自己学習内容ポートフォリオの紹介・提出されたポートフォリオの評価・外部講師の講義・レポート」を組み合わせ ZOOM のブレイクアウトミーティングを活用しファシリテートしている。

●実習科目

方針 2：把握された生理反応の知識について活用法を把握させる

方法 1：介護方法を知識習得の可視化と基礎疾患を把握するためのバイタルサイン測定原理と方法を教示する。

方針 3：バイタルサインから得られる疾病・薬効・副作用の把握

方法 1：人体シミュレータを活用し、症例と組み合わせ、治療のターゲットや服薬指導のポイントを具体的に示して明確化させる。

●研究活動

方針 4：未知の生理反応や医薬品開発のためのプロセスおよび新しい評価法方法 1：「主観的な見方」から「客観的な見方」が出来るように指導。

学生間で進行している研究内容の未知と既知を把握するためプレゼンテーションを実施し、未知の内容を公表していく意義を把握させる情報交換会を設定して実施している。

●クラブ部活動

方針 5：人間形成・社会活動への意識

方法 1：学生の自主性を尊重し、必要に応じてアドバイスする。

【成果・評価】

●講義科目：学修への理解度・意欲向上・薬剤師へのモチベーションアップにつながったというアンケートがあった。学生自身の調査意欲・進級時の科目の理解の土台となる知識や医療人となる覚悟、治療薬への興味が培われたというフリーコメントもあった。選択科目「自然科学概論」の学修により「機能形態学」の興味や重要性を理解したコメントがあった。

●実習科目：バイタルサインの測定原理や測定意義が把握され、薬剤師が取得するバイタルサインの測定意義・治療薬の目的と意義が明確化されたというアンケートがあった。

●研究活動：データの解析と文献調査より既知と未知が把握され、客観的に実験結果と既存知見に基づき考察された卒業論文が作成された。

【目標】

(短期目標)

●現時点での成果・評価は、薬学部における自身の役割は、薬剤師として活用できる基礎知識が教示と基礎知識の活用法が具体的に教示されたと考える。更に、基礎知識の定着方法についても演習問題をアップデートし必要な知識の明確化をはかっていく。講義毎に目標設定を言い、授業後に目標の達成状況を確認させる。

(長期目標)

●将来目標として卒業後、学生が巣立った大学に再び訪問し、臨床での情報提供や、臨床における問題点を逆に大学側にフィードバックされるような、人間関係の構築と情報の共有しあえるような関係づくりと、教育が共育となり更なる大学の発展にすることが目標である。

更に、卒業生が新しい医薬品の開拓のための「研究マインド」を持った薬剤師を育てるため、「未知への挑戦」「根拠に基づいた考察により問題点を明確化する」というプロセスを常に意識し教示していく。